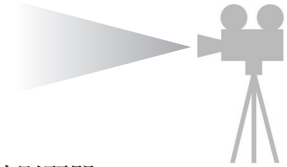




## 映画とその時代 ②



住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

アメリカの（団塊の世代）は日本とはケタ違いのスケールだ。ベビーブームは同じ1946年に始まるが、アメリカでは64年まで続き、総勢7千万人を超える世界最大の団塊だ。

このベビーブーマーはその成長につれ、この国の政治、経済、社会をまるでブルドーザーのように揺さぶってゆく。そしてその先頭集団が成年期にさしかかる60年代半ば頃から、大人たちの守る（古き良きアメリカ）に不信の眼を向け、反撥の姿勢を示し始める。

一方的な道徳観の押しつけ。家父長的権威主義のもつ偽善の匂い。当時の若者たちの合言葉は（プラスチック）だったという。一見ほんもののように見えるが、実はフェイクに過ぎない。彼等にとってそれは、いわば世の中の悪と偽善を象徴する言葉だったようだ。

このカウンターカルチャーの鬱積は、次第に大きなマグマにふくれ上がる。そしてそのエネルギーが初めて社会事象として現れたのは映画市場だった。

1967年、ハリウッドは眼を疑うような光景に仰天する。低予算のB級作品に過ぎないと見られた『俺たちに明日はない』と『卒業』の上映館に信じがたい数の若者たちが押しかけ、長蛇の列を作ったのである。

この時期、ハリウッドは長い低迷の底に喘いで

いた。戦勝気分の活況が去って50年代半ばを過ぎると観客数は激減する。大人たちは子育てに追われ、新たにテレビが家庭のリビングを占領した。ハリウッドは挽回に躍起となり、さまざまな試行錯誤に陥る。大型スクリーン、立体映画、巨額を投じた歴史もの超大作。しかしテレビを意識しすぎた狙いはほとんど外れ、採算割れが続くばかりだった。

ところが、製作費わずか3百万ドルの『卒業』が史上空前の観客動員を記録し、何と1億4千万ドルの興収を上げたのである。この数字がハリウッドの方向性を一変させた。人口動態の変化の大きさを初めて思い知ったハリウッドは、この67年を境に、新しい時代の主役であるベビーブーマーを観客層のメインターゲットに据える。そしてその疎外感やモラトリアム感覚を汲み取った作品を次々に送り出す。『イージー・ライダー』『明日に向かって撃て！』『いちご白書』、さらにアカデミー賞を獲った『真夜中のカーボーイ』。この一連の作品群をタイム誌が（ニューシネマ）と名付けた。

たしかにこの国の団塊の世代は、ハリウッドの新しい境地を切り開き、昔日の勢いや輝きを取り戻した。しかしその半面、（古き良きアメリカ）を、良かれ悪しかれ跡形もなくぶち壊したのもひとつの事実だろう。――